「太平山麓九条の会」だより

事務局：須黒法律会計事務所　〒328-0027 栃木市今泉町 2-4-18　FAX0282-22-3757
電話連絡先0282-22-7079(増田)
Eメール oohirasanroku9jo@yahoo.co.jp　ＨＰ：太平山麓九条の会で検索

１３６号
２０１８年８月２３日発行

戦後73年「夏に思う」

太平山麓九条の会副代表
舘野　サク子

「ありのまま」語り継いでいきたい

「夏が来れば思い出す―」私も二度訪れた尾瀬は、確かにいい思い出となっている。だが、私は１９４５年の夏にこだわる。

満州事変の年に生まれ、15年戦争の中で育った私は、軍国少女として鍛えられた。県立高等女学校の組織は軍隊のそれに習い、大隊、中隊、現在の「学級」は小隊と呼ばれた。クラスという表現は敵性語ゆえに禁じられた。配属将校として学校に来た軍人が生徒を指導し、教練が課せられた。小隊の匍匐前進が指示通りにできないと叱責され、小隊長の私は軍隊式の平手打ちを喰らった。

上級生は太田の中島飛行機製作所に動員され、私達下級生は働き手を軍隊にとられた農家の手伝い。校舎は教室間の壁を取り払って零式戦闘機の胴体の組み立て工場になった。

春。茨城沖に迫った米軍は、艦載機の大編隊で夜間に太田を空襲。投下された時限爆弾は、朝7時に一斉爆発。三鴨山東斜面でも。レーダーはこの山塊を攻撃の目標物と感知したのだろう。白昼の空襲も繰り返された。青空高く飛行するB29の大編隊は、ガラスの破片のようにキラキラと輝いていた。館林の飛行場から迎撃のために飛び立った機体の幾つかは、火を吹いて落ちていった。結核療養中の姉は、その様を見て声をあげて泣いた。

連合軍は茨城海岸に上陸すると想定し、北関東の山には陸軍の陣地が構築され、高射砲も配備された。中国東北部の敗北を、帝都防衛の美辞で糊塗し、朝鮮半島から新潟、群馬を経て戦車隊もやって来た。その指揮官の一人が、後の作家・司馬遼太郎だ。

佐野高女2年生の私は帰途、米軍艦載機の大群に遭遇した。電車の駅から東の山麓まで2粁の一本道は遮蔽物皆無。低空飛行で西進する小型機。突如、異様な爆音が背後から迫ってきた。私は、道路沿いに戦車隊が掘った蛸壺に身を隠した。機上から発射された銃弾は土埃をあげ、畔に繋がれていた農耕馬は血にまみれた。私は、迫ってくる機体の風防の向うに、異国の兵士の顔を見た―恐怖ゆえの錯覚か。

3月10日の東京大空襲。南の地平線は真っ赤。祖父は関東大震災の時に比べようもない程ひどいと言った。宇都宮も空襲で焦土と化した。

8月13、14、15はお盆休み。15日の正午、ラジオから重大発表として終戦（実は敗戦）の詔勅・玉音放送が。柱に寄りかかってそれを聞いた私は、その場にへたり込んだ。もう空襲はないんだ―安堵。でも日本は敗けたんだ―悲しい。

16日登校。全校生徒を前にして校長先生は「大東亜戦争に負けて、天皇陛下に申し訳ない云々」と訓示。講堂はすすり泣きから嗚咽へと移って行った。

教科書も「国体の本義」も図書室の本も、進駐軍の方針に従って校庭で焼却された。「民主主義」や「新しい憲法の話」が配布されるまでの混乱と模索の時間。

それから73年。あの夏の体験は、今、本当に活かされているのだろうか。自分の非力さが悲しい。だが、せめて「ありのまま」を語り継いで行きたいと思っている。

◆「コスタリカの奇跡」DVD視聴＆交流会

軍隊のない国「コスタリカ」とはどんな国？
9月2日(日)午後1時半～午後4時
栃木市栃木文化会館　大会議室

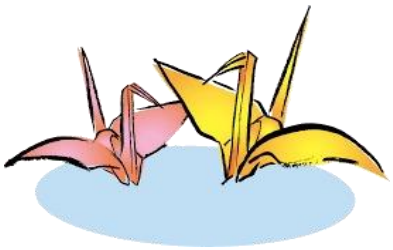
◆語りつぐ戦争―小金井空襲

「映像と証言」空襲の記録視聴ほか
お話は　簗昌子さん(83歳)
栃木市栃木文化会館　大会議室
9月30日(日)午後1時半～午後3時半

◆スタンディング

9月　9日(日)栃木市役所前
9月19日(水)栃木イオン・カワチ薬品前交差点
※午後4時～　約30分間

戦後73年「夏に思う」



8月の悔いと祈り

梅村　貞子

今年も東京都慰霊協会から、9月1日の慰霊祭の案内が届いた。墨田区横網にある震災記念堂に、東京大空襲の犠牲者の霊を合祀した慰霊堂での例祭である。夫の兄二人がそこにまつられている。

昭和20年1月27日、兄二人は当時20歳と19歳。上の兄は栃中（現栃高）を卒業後、軍属として海南島で日本語の教師をしていた。たまたま帰省していて下の兄の高等師範受験に付き添って上京し、その帰りがけ銀座空襲に遭って、4丁目の地下道に逃げ込み、爆風で窒息死したそうである。

9月1日と3月10日の慰霊祭には夫と何年間か参列していたが、最近は塔婆料を振り込んでの供養とさせてもらっている。8月のはじめにそれを済ませた私は、母と夫の仏前に報告した。穏やかな笑みを浮かべた母は勿論何も答えなかったが、私は「おばあちゃん、ごめんなさいね」と詫びるのだった。

母と同居してから約15年、兄たちのことは夫から聞いて知っていたが、母から直接聞いた覚えはない。まして、そこまで育てた息子二人を思いやっていたわる言葉などかけることもなく、永遠に別れてしまった。

今ならわかる、今なら言える、どんなに驚いたことか、どんなに悲しかったことか。「おばちゃん、つらかったですねー」「よく耐えてこられましたねー」と。

でも、当時は仕事と家事とで精いっぱい、母の身になって話しかけるゆとりもないまま、世話になりっぱなしで見送ってしまったのである。

直接命を奪われた兵士や、空襲などで犠牲になった方々の無念さは計り知れない。しかし、生き残った人たちもみな戦争の影響を背負いながらそれぞれの立場、それぞれの分野で必死に生きてきた。終戦後73年たった今、それらの人々はもう大半亡くなってしまっている。自分の苦しみを訴えることなく。黙って。

今日は8月9日、長崎の平和祈念式典に合わせて黙とうをしながら、私は母を思い、それらの方々を思い偲んだ。そして、これから後、このようなことが絶対にないことを願い祈った。

わたしのおすすめ絵本

安田　民和子

「モチモチの木」

齋藤　隆介　作
滝平　二郎・絵

私が子どもの頃、母親に読んでもらったたくさんの絵本の中でも、大好きだった一冊です。

じさま（爺さま）と二人で暮らす5つの豆太は、臆病者で夜中にひとりでせっちん（トイレ）にも行けない。特に「モチモチの木」と呼んでいる大きな木が怖くてたまらない。じさまは、毎晩すぐに目を覚まし、豆太のしょんべんにつき添ってくれていた。

ある夜豆太は、腹痛で苦しむじさまの声で目を覚ます。

―イシャサマヲ、ヨバナクチャ―

豆太は家を飛び出し、真夜中の道を裸足でかけだした。霜がささり、痛くて泣きながら走った。怖くてたまらなかったが、それでも走った。その日、モチモチの木に灯りがともるのを豆太は見た。前にじさまが、一年にいちど、勇気のあるこどもだけが見ることのできる、山のかみさまの祭りだと話していた・・・

元気になったじさまの「にんげん、やさしささえあれば、やらなきゃならねえことはきっとやるもんだ」の言葉が胸にささります。

ほんとうの勇気とは？やさしさとは？と、静かに語りかけてくれる絵本です。今では2歳になる甥もお気に入りの絵本で、「モチモチよんでー」と、ママにせがんでいます。